

Title	多文化地域における神社の研究：生野猪飼野・御幸森天神宮の場合
Author	岩山, 春夫
Citation	空間・社会・地理思想. 24 卷, p.3-21.
Issue Date	2021-03
ISSN	1342-3282
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	Publisher
Publisher	大阪市立大学都市研究プラザ
Description	
DOI	10.24544/ocu.20210715-001

Placed on: Osaka City University

多文化地域における神社の研究

——生野猪飼野・御幸森天神宮の場合——

岩山 春夫*

Haruo IWAYAMA

The Study of a Shinto Shrine in a Multicultural Area:
A Case Study on the Miyukimori Shinto Shrine in Ikaino Ikuno, Osaka, Japan

要旨

大阪の生野猪飼野地域といえば在日韓国朝鮮人の集住地域である。そこには当然にも古くから何世代にも亘って居住し、地域を形成してきた日本人の歴史がある。この両者の存在によって、この地域には約 100 年に亘る民族関係の歴史が形成されることとなった。本論文は、あまり注目されることのなかった、その日本人の側からの調査研究である。調査研究の対象は日本社会の主要な民間団体の代表や個人であり、ここでは御幸森天神宮の森田眞臣宮司への聞き取りを中心に内容をまとめた。また本論文の内容は、御幸森天神宮の歴史、天神宮の組織、多文化地域であるが故の在日コリアンと天神宮の関係、天神宮と女性の問題、そして多文化共生事業である王仁博士歌碑建立等についてである。この調査研究によって、一般にはあまり変化しないものと思われがちな神社にあって、時代と社会の変化に対応しようとする姿を垣間見ることができた。

キーワード：猪飼野、御幸森天神宮、在日コリアン、女性と神道、多文化共生

The Ikuno Ward, Osaka City has the largest Korean population and the highest Korean population density in Japan. "Ikaino" is the symbolic local name. But naturally, many Japanese lives there, too. And they make their own history over so many generations. Ikaino has been constructing the history of inter-ethnic relationships between Japanese and Korean residents in Japan over 100 years since the annexation of Korea in 1910. This paper is a study from the point of view of Japanese who lives in Ikaino. There has been little studies which focus on them in Ikaino like this paper.

The research objects of this paper are Japanese associations and their members in Ikaino. Especially Masaomi Morita, the chief priest of Miyukimori Shinto Shrine, is the major informant of this study.

In this paper, I will inquire into the history of this shrine, its organization, relationships between Korean residents and the shrine, the relationships between the Shinto shrine and women, and the problem of the Monument inscribed with Dr. Wani's poem, and so on.

Through this study, we will be able to find that the Shinto shrine accommodates itself to the change of age and society.

Keyword: Ikaino, Miyukimori Shinto Shrine, Korean residents in Japan, women and Sinto, Multiculturalism

はじめに

本研究は、2016年に谷富夫の示唆を受けて始めることになった。1980年代に生野猪飼野地域の調査研究を行った谷の示唆は、「この地域は在日の側から研究されることが多いが、いちど日本人の側から掘り下げた調査をしてみてもどうか」というものであった¹⁾。

生野猪飼野といえば在日コリアン集住地域として有名だが、そこには当然にも古くから何世代にも亘って居住し、地域を形成してきた日本人がいる。しかし、その歴史はあまり知られていない。調べて行くうちに何冊かの本にしっかりまとめられていることがわかった。『猪飼野郷土誌』(1997年)、『御幸森天神宮・壹千六百年祭記念誌』(2006年)、『猪飼

野地車130年記念誌』(2015年)などである。本研究は、これらを導き手に当事者たちへの聞き取りを行って、生野猪飼野地域の人と社会に関する研究を一步でも進めることを目指している。

ところで、生野猪飼野の地域研究を行うには、その前にこの地域の地理・地形をよく理解しておかなければならない。そうでないと、たとえば、なぜ道路を挟んで2つの神社、弥栄神社と御幸森天神宮が隣り合って建っているのか分からない。

古代の大阪は、上町台地と生駒山に挟まれた地域が海であった。それがしだいに淡水化して河内湖を形成する。また、奈良盆地から流れ来る大和川が今のように入野川に直接流れ込むのは江戸期の付け替え工事後のことで、元々は北上して河内湖に流れ込んでいた。この旧大和川の支流の1つに入野川(別名

* 大阪市立大学大学院創造都市研究科都市共生社会研究分野修士 都市政策修士

百済川)があり、これが河内湖へ注ぐ河口部分に猪飼野は存在した。弥栄神社と御幸森天神宮の間の現在の道路、通称疎開道路は、かつての平野川であって、木野村と猪飼野村を隔てていたのだ。弥栄神社と御幸森天神宮は、川で隔てられた2つの村の鎮守だったのである。

平野川は、新平野川の開削工事が1919(大正11)年から始まり、1939(昭和14)年に完工したことで埋め立てられてしまう(高2011: 333)。この開削工事の背景は以下の通りである。河内湖の地底が徐々に上昇し、大阪平野を形成する過程で、そこに流れ込む旧大和川が蛇行し天井川となったために、支流の平野川はよく氾濫した。この地形にこそ、開削工事の元々の根拠があった。埋め立てられる前の旧平野川は水清らかで、よく泳いで遊んだという古老の証言がある。

また論文末に記載した3つの地図では、今につながる江戸明治大正期における猪飼野の変化を見てとることができる。1892(明治25)年の地図(図2)は、上1886年、下1892年の地図を結合したものであるが、1889(明治22)年の市町村制以前の状況が描かれ、猪飼野村、木野村など、太破線で囲った村々は江戸の藩政村である。村はまだ田んぼの中の小島のような。1908(明治41)年の地図(図3)では、市町村制後、江戸藩政村は大字と呼称を変え、まとめて鶴橋村、小路村などができる。猪飼野、木野、岡などが鶴橋村に合併された。1921(大正10)年の地図(図4)は、添付地図ではわかりにくいですが、ここでは鶴橋村が鶴橋町になっている。すでに新平野川が形を現していて、その西側の宅地化が始まっている。この地図の少し後くらいからこの地への朝鮮人の居住が始まってくる。旧平野川はまだ埋め立てられておらず、鶴の橋も御幸森天神宮前の川の引き込みも見てとれる。

聞き取り調査は、2017年5月の猪飼野保存会、2018年5月の御幸森天神宮・森田眞臣宮司²⁾など、2017年から2018年にかけて地元の方々を対象に行った。

この地域には約100年に亘る民族関係の歴史がある。この間、さまざまな対立や葛藤を超えて、まちと生活を豊かにした現在の共生関係の形ができあがっている。この歴史を知るために、まずは鎮守の森である御幸森天神宮をひも解くところから始めたい。森田宮司のお話は時代を追って分かりやすく、多文化地域の神社としての周囲への配慮もあることから、できるだけ彼の語りを多用させていただくこととする。なお、引用文中足りない言葉などを()で補うようにした。

1 宮司

1.1 森田宮司の家系

森田眞臣(まさおみ)宮司は1943年にこの神社で生まれた。森田家の三代目になる。初代賢治は代々継いでいた兵庫県高砂市の荒井神社より1928(昭和3)年、本殿構築のために請われて御幸森天神宮に来て、第六代社掌に就任する。その頃宮司という職階があるのは大きな官社だけであった。二代目道三(みちぞう)は、戦後すぐの1946(昭和21)年、第七代宮司に就任した。そして、現宮司の三代目眞臣は1997(平成9)年、54歳で第八代宮司に就任した。彼の息子が現在(2018年)、天神宮の禰宜を務めている。

1.2 森田宮司の略歴

小学校は地元の鶴橋小学校で、中学・高校は浪速学院・浪速中学高等学校で学んだ。浪速学院は神道教育の実践を建学の精神としている。

「浪速中高。別に神社のことを教えてくれるわけではないけど、でもその学校(には)神社があって、入るときに拝礼をする。」

大学は法政大学文学部で、18～22歳まで東京に居住した。大学卒業後は、京都の石清水八幡宮にて10年間修業する。

「わたし兄がおりましてね、神主しないっていうから急遽させられて。」

「向こう(石清水八幡宮)ではね、典仕³⁾でして。権禰宜の下ですわ。」

「私は、神道の大学を出てないの。」

兄が神社を継がないということで、大学を終えて京都の石清水八幡宮で31歳まで10年間修行する。そこでの身分は典仕。典仕は正式な神職ではなく石清水八幡宮では新人はみな典仕からの出発だった。大阪以外での生活は、学生の時の東京と石清水八幡宮の京都での14年間である。

【小学校時代の在日の友人】

—森田さんの小学生のときに、鶴橋小学校のときに、在日のこどもたちもいたわけですね？

「おりましたよ。あの当時ね、まだ小学校入ったころは靴はいてるもんが少なかった。」

「下駄か草履かね。(在日も日本人も)みんなそう。」

「せやから、みな貧乏やから、別にみなそうやから一緒やから、みな苦にならなんだね。向うの子(在日の子)は昼からいなくなるわけですよ、朝来るけど。あの当時、弁当やったか給食やったか、とにかく昼から、なんでどっか行ってしまふのか、急に家に帰ってしまうのかなと。もう小学校から勤めてはんねん。親を助けてね。」

給食の時間になると在日の子らが学校を抜けて行くというのは、他の聞き取りでも証言されていた。給食費が払えないから給食袋は持って行く(空の袋を先生に渡す)が、食べないで帰っていたと。鶴橋小学校は、森田宮司の時代は1学年250人位、その後の団塊の世代になると400人位になった。そのうち半数が在日の子も達だったと証言されている。

【在日の人達との付き合い】

一在日の人たちとの親交というか、おつきあいは現在もあるんですか？

「んー、もう僕らの友達いないな。付き合いというほどの(人はいない)。みな今若いもん(の世代に替わっているから)。」

「知ってるいうほどの人はいませんな。もう日本人にたいしてもそうやもん。知ってるいうほどの。まあ保存会の人とは別にして、他の人はね。みな小学校の友達も中学校くらいから、よそへ行ったりしてから。あの当時、僕が小学校のあれ(同級)で250人くらいか、一学年。そのうちこの辺にいてんのはIはんも入れて20人もいてるかな。あれ(Iはん)は地元のあれやから、他所へ行かれへん。」

世代交代していて、今では在日も日本人も付き合いがほとんどないという。森田さんは、かつては地域の役職もやられていた。

「誘われましたな。幼稚園、小学校、PTA会長を務めたり。校舎建てるのに委員長にさせられたり。それから民生の推薦委員をしているくらいかな。」

2 御幸森天神宮の歴史

2.1 起源

御幸森天神宮の起源は1600年前といわれているが、これには特に根拠があるわけではなく、伝承にもとづくものである。「文字の無い口承で物事が伝

えられていた時代、神話伝承が歴史そのものであった」(村井2013: X)。伝承が真実であるかどうかはともかく、伝わったというのは事実である。

「この神社ができたんは1600年ちょっと(前)になるんですけど。これは伝承に基づくところが多いんで。まあ神社いうのはだいたいそんなもんで。特に氏神さんと小さい神社は、だいたい昔からの伝承とか、そんなが主でしてね。」

【神社誕生のいわれ】

「この神社の生まれについては、仁徳天皇さんが鷹狩のおりに、渡来人の百済の人たちを検分に行つて(当時河内の方に多く居住していた)、(途中)ご休憩された。まあ行幸(ぎょうこう)ということで、この森が御幸の森と言われるようになったという話です。」

「(その後)仁徳の天皇さんがお亡くなりになって、そのあと村の人が、御幸の祠(を)建立して)仁徳天皇さんの御霊をお祀りして、神社のカタチができたといういわれがある。」

「さあ、祠いうてもどんなものかわかりませんけど。」

「境内に遙拝所(ようはいしょ)というのがあって、そこに(仁徳天皇さんが座ったという)おっきい石がありまして。」

この話はお爺さんから聞いたと森田宮司は言う。また、鷹狩りの折には朝鮮半島渡来の酒君⁴⁾という鷹狩りの専門家が付いたという。

【猪飼津・猪甘部について】

「この辺りは、神社ができるまではイカイツ(猪甘津)というところで。」

猪飼野に関連する地名は、『日本書紀』仁徳十四年の条に「猪甘(飼)津に橋わたす、すなわちそのところを名づけて小橋という」とある(荒木2006: 50)。津とは港のことであり、猪甘津は平野川の河内湖への出口を指す。森田宮司はこのことを次のように言っている。

「それからちょうど大和川がこっち側を通っていたそうで、それがだんだん砂が溜まって、平野になって猪飼野になったという風なあれでしてね。」

また、この地域には猪甘部(いかいべ)が住んでいたという。

「とにかく猪甘部っていう部族が住んでまして、その関係で猪甘部、猪甘津と(言われて)ましてね。その猪飼部という部族はイノシシっていうかイノブタっていうか、それを飼育していて、天皇家にも奉獻したという話がありましてね。これは瀧川先生の論文にも載っています。」

瀧川政次郎(1971)によれば、猪甘部は九州にいた単人族・安曇族が地方に散ったものであって、飼育していたのは中国の華南の豚であったという。

また、西川寿勝(大阪府立狭山池博物館学芸主査)によれば、日本の古代のイノシシとブタには骨形質に違いはなく、見分けられない。弥生・古墳時代の食用のイノシシは大半が家畜化されたブタだということである。また、『播磨国風土記』には「猪飼いと名付けられたのは、難波の宮で天下を治めた天皇(仁徳)の御世、日向の肥人の朝戸君(あさとのきみ)が天照大神を奉る舟で、猪を持って来て献上した。天皇に飼育場所を求めたところ、この地を賜り、猪を放して飼った。故に猪飼野という」とあるという。

以上を整理すると、猪甘部は九州方面から来た人たちで、猪飼野で飼育していたのは家畜化されたイノシシ、すなわちブタであったということだろう。

ちなみに、猪飼・犬飼・鶴飼・鷹飼・馬飼など自然の動物を自在に操る技術は、人として徳がある証拠として神から認められているとされ、このような者達を多く従えることは王の徳でもあった。当時は天皇の勢力の及ぶ範囲とその外界とに分けられていて、王のもとに多くの外界の人達が集まって来ることが王の徳が高いとされたので、海を渡って来る渡来人も、九州あたりから来る技能者も、官吏として召し抱えたという⁵⁾。

【猪飼津の橋と鶴の橋】

「でまあ、仁徳天皇さんが猪飼津に橋をかけると。(それが)文献による最初の橋やと。この猪飼津の橋はどこにあったか、それはもうひとつ分からない。神社の前に百済川があると、(今の)疎開道路ね。後の人が、その(川にかかっていた)鶴の橋っていうのが、それが猪飼津の橋ちゃうかって、そうなってましてね。まあそれもあくまでも、この辺の人らの伝承で。あの(仁徳さんが架けた)猪飼津の橋やとなってまして。その川沿いに、小橋(おぼせ)という地名の土地があった。そんなところに仁徳さんが橋を架けてくれはった。」

前にも述べたが『日本書紀』仁徳十四年の条に「猪甘(飼)津に橋わたす、すなわちそのところを名づけて小橋という」とある。この仁徳天皇が架けた日本最古の橋とされる猪飼津の橋と、江戸時代から見聞され、1940(昭和15)年の旧平野川埋め立てにより廃橋となった鶴の橋とは同じものか?いまのところ二つの橋を結びつける証拠はない。後注に二つの意見をまとめておく⁶⁾。

2.2 祭神

御幸森天神宮に祀られている仁徳天皇以外の神々、森田宮司の語りをもとに整理する。

【653年、少彦名神(すくなひこなのみこと)が祭神になる】

「平安時代に当時のやはり病(である)疱瘡が全国的にはやって、この村の人も難渋した。当時、僧行綱が神社の社僧⁷⁾にいてはって、病氣平癒のために五条天神社の御分霊(少彦名神。病苦を救う神)をいただいでお祀りしたと。それで、まあ、その病氣も治ったと。」

宮司によると社僧行綱は「住むともないしという、多分、近くのお坊さんか旅のお坊さんやないかな」という人だった。

【1615年、忍坂彦命(おさかひこのみこと)が祭神になる】

この神を祭っている神社は稀有な存在だという。

この押坂彦命はもともと玉造清水谷付近にあった天神社に地主神(土地を守護する神・地域開発の祖神)として奉られていた。ところが、この天神社が1615(元和元)年、大坂夏の陣で消失してしまった。それを憐れんだ大阪城初代城主松平忠明が、御幸森天神宮への祭神奉還を指示したという(荒木2006:56)。

「こちらにお祀りするについては、これは元和(げんな)二年で、関ヶ原が終わって、太閤さんが負けて、徳川さんが城を新しく作った。そのときの初代(城主)の松平忠明さんが、この夢(消失した夢)を見たそうなんです。」

「で、百済川中州の地三千歩(三千坪)を神社に奉納したと。(さらに)灯明台一基を寄進すると。それがこの前(境内)にある。実際に土地を奉納してはんのんで、まあそれらしいこともあったんかなと。」

「百済川の中州の地やから、当時はひろい川やった

ようですね。また当時は弥栄神社の前の道とウチの前の道(の)間が川で、その川に橋が架かった。」

【1885年、小路の社を合祀する】

時代は進み明治になって、小路の社を合祀し、学問の神様・五穀豊穰・雨乞い・風水を鎮めるなどの神様である菅原道真を祀ることになる。

「神社の裏に『猪飼野の内、小路の社、合祀さる』(とある)。これが、明治18年ですが、この小路の社というのは、勝五地車がおいてあると知っていますか？

(かつて) あそこに小路の社があって。大洪水があって社が流されてしまった。」

「猪飼野字小路村という村があって。で、洪水に流されてしまったんで、御霊をうちの神社に奉還してほしいということ。」

「小路のお社、神社は天神さんを祭ってあったそうなんです。梅鉢。今でもダンジリに梅鉢入れてますけどね。菅原神社建設と(なりました)。」

なお、御幸森天神宮にはこれらの神々のほかに、御幸稲荷神社、御幸戎神社も祀られている。

2.3 出雲系と大和系

祭神には大別して二つの系統がある。一つは大国主命に象徴される出雲系。もう一つは、この出雲勢力が建てた邪馬台国に侵攻し、「国譲り」(くにゆずり)を受けたという大和王権の大和系である⁸⁾。

両者は明らかに違う祭神を有したのだが、今では二つの系統をとともに祀る神社がある。御幸森天神宮も、隣りの弥栄神社もそうだ。御幸森天神宮は元々仁徳天皇の大和系で、弥栄神社は素盞鳴命(すさのおのみこと)の出雲系であった。どうして二つの系統の祭神を神社に祀る事になったのか、それで問題はないのか、森田宮司に聞いてみた。

【両系統の併存】

一祭神の少彦名命は出雲系で、仁徳天皇は大和系ですが、どうして併存できるのですか？

「これね、スクナヒコさんは病気を治す神さんですからね。スクナヒコさんは、薬の神さんですな。」

「仁徳さんと直接つながりはありませんけど、村の病気のお祓いする(ということ)で、五条天神社の御心霊をお受けして、スクナヒコさんはこちらにこられた。」

「それに、由緒ある官幣大社やったらちょっと違う(両系統の併存は無理)かもしらんけど、同じ神さ

んに助けてもらうということなんやから。」

「うんそう。あの、スサノウノミコトさんですね。で、スサノウノミコトさん、老病神やから、これまた多いんですわ。このあたりの生野神社とか、だいたい多い。」

【出雲系神社の特徴】

ここで出雲系神社の特徴を見ておく。お尻を上げた狛犬と社日(シャニチ)が出雲系の指標になる(村井2014)。社日とは五角形の石柱に神々の名前が刻まれている、護国豊穰を祈るもの。

しかし、大阪市内の出雲系と思しき敷津松之宮・大国神社に行くと、正面の狛犬はお尻を付けて座ったかたちの大和系である。また、神官らしき人に社日について聞くと知らないという。

弥栄神社の東門を入ると、お尻を上げた出雲構えの一对の狛犬がある。年代は書いてあるが読みとれない。社殿正面の狛犬は大和系である。出雲系狛犬は植え木の陰に佇んでいた。社日はどこにも無かった。

【弥栄神社】

弥栄神社は400年前に熊野大社より分霊したものだ。ちなみに、弥栄神社は今年、熊野大社(島根県松江市)に行つて本殿のしめ縄を新調した。祭神は、素盞鳴命(すさのおのみこと)と仁徳天皇。なぜ仁徳天皇がここにあるのだろうか。この疑問は生野区役所のサイトで明らかになった⁹⁾。

「<弥栄神社> 神祖素盞鳴命(すさのおのみこと)を文禄年間(1592-1596)に熊野巫神社(旧出雲国意宇郡)より分霊奉還したのがはじまりと旧記にあります。その当時は牛頭(ごず)天王社と呼ばれ、創立以来旧木野村の鎮守として崇敬厚く宮座を設けて奉仕し、明治5年(1872)村社に列せられ、社号もこの時に彌栄神社と改められました。明治43年(1910)、氏子協議のうえ大字岡村(現勝山北4丁目)の御館(みたて)神社を合祀しました。その御館神社は、旧岡村の生土神(うぶすながみ)でいばらの神と呼ばれ、仁徳天皇の殿(まど)の旧跡で、現在は彌栄神社の御旅所(おたびしょ)となっています。」

弥栄神社に仁徳天皇が祭神としてあるのは、仁徳天皇を祭神とする神社を合祀したからだった。明治の廃仏毀釈の時を経て、牛頭天王を祭る神社は少なくなつたという。以下も、森田宮司からの聞き取りである。

一明治になって、国家神道になることによって、出雲系の神社の立場が悪くなるようなことがあったのですか？そこで出雲系は大和系の神社の神さんを持ってきたりする事があったんでしょうか？

「わりとね、ご祭神変わる神社が多いんですよ。その時の権力者のあれによってご祭神が変わると、そう聞きましたかね。神社として、氏子のみなさんのためにやってくるにはそういうことも別に、みんなが納得したらそれでいい話です。元々どっちかという、氏素性ってのは、も一つちっさい神社は、病気が流行ったら病気の神さんお呼びするとか、そんなことは結構ありますからね。それを別に非難することはないし、おなじ神さんやから。」

「あの病神とか、田んぼの神さんとか。火の神さんとか、水の神さんとか。まあいっぱいおられたんですね。まあそれでみんなが幸せにいたらそれでいいわけ。」

森田宮司によると、出雲系も大和系も特にこだわる必要はなく、その時代時代に民が必要とする祭神をお呼びすればよいとの事であった。大変おおらかなものだ。

大和王権は元々「国譲り」によって政権を樹立するのだから、その時、出雲系祭神をそのまま飲み込む事になった(村井2014)。したがって、大和系と出雲系が併存する事は特に問題にならない。ただ、国家神道下では大和系の祭神が皇統(天皇)と国家の功臣であったのに対し、神話の神々が祭神である出雲系とは明らかにその依拠するところが違っている。このことは今後の課題として研究して行きたい。

2.4 宮座

神社は誰が中心になって祭祀と運営を行い、誰が支えて行くのか？それは時代によって違っていた。当初、神社は社僧が取り仕切っていたが、その後宮座が取り仕切るようになった。宮座とは、一般的には村氏神を祭る村人の集まりのことである。当番制で司祭者に当たる人を決めて、祭礼や神社の管理運営を行った。多くの場合、村の指導的な立場にある決まった家筋の人々により構成された。このような排他的・特権的な宮座を「株座」といった。また、江戸時代中期以降、指導層の没落、新興勢力の台頭などで、宮座が村全体に開かれて行く場合があった。そのような宮座を「村座」といった。村座を「諸座」ともいう(創建壹千六百年祭実行委員会2006: 102)。

また、江戸時代の神社は祭祀や維持・管理を行う主体によって、神職持ち(神職が行う)、社僧持ち(僧

侶が行う)、修験持ち(山伏が行う)、村持ち(宮座など村落の代表者集団、または村全体で行う)などに分類できる(同上: 103)。江戸時代の神社に関しては後注にまとめておく¹⁰⁾。

御幸森天神宮は、1616(元和2)年に社僧を廃して宮座になった。さらに1908(明治41)年になって、社格制度と職階制により、宮座を廃して社掌を置き、氏子総代制(4名の氏子総代。今の氏子総代制とは違う。)とした。弥栄神社は今も宮座制をとっている。

「元和2年から社僧を排して宮座を置くという(ことになる)。宮座(とは)村の有力者が集まって、神社を世話すると。まあ、神主さんも坊さんもいてへんのんでね。で、その宮座をこの時につくったという。宮座のお名前については、仁徳さんの座った石の、石垣に名前を彫ってあります。21者あったのかな？」

2.5 国家神道——明治になって

明治新政府は幼い天子(14歳)を擁して、新政権の権威を確立するためには天皇の神権の絶対性が必要であった。これは西欧国家においてキリスト教が国教になっていることを模倣したものであるが、この神道国教化政策で形成されたのが国家神道¹¹⁾である。

国家神道は皇統と国家の功臣を神として祀り、頂点に宮中祭祀と伊勢神宮を置き、中間に各地の官・国弊社を配し、底辺に村々の産土社(うぶすなしゃ)をすえ、それ以外の多様な神仏との間に、国家の意志で絶対的な分割線を引いてしまい、それまでの日本人の宗教生活の全体をすっかり転換してしまうものになった(安丸1979: 7)。

しかし、末端にまでその国家意思が行きわたることはなかなか難しく、形骸化されたものになったようだ。御幸森天神宮は村社という社格¹²⁾をもらった。

「明治になって、今度は、このときに国家神道いうことになって。」

「それまでは、皆そういう国家から色々言われず、それぞれの神社だけでやってた時代で、それが国家神道になって。で、国家神道になったんやから、社格をあげると。明治5年に『村社』という位をいただいた。」

「一応格好としては国家神道で、それが全部統制されたって感じですね。」

「せやけど、内実は、そんなちっさい村までいきわたりませんから。ただ年に一回市か府から(役人が)来るらしいです。そのときだけ(昼食に)井ものを出す。親父に聞いた話ですけど。来て頂きたい

う感じで。そんなん聞きましたね。せやから、結局役所の下に神社があったんや、みたい。今はもう、そんなんしたら大問題になりますけどな。」

「国家神道になったときは、神主は国家のまあ役人みたいなんになったわけです。」

「まあ役人というか、官僚というか、名前だけはね。で、給料なんかも国家からアタとこはナンボという話。ところがこれ、そんな入りませんので、みんな自分でね（準備した）。名前だけね。まあそういう時代でした、明治の初めは。」

「兼務社司、社司か。その頃は、宮司とかいうのはおっきい官社だけで、我々の神社は社司、社掌とかいう名前でしたね。」

「私らも、そんなん知らなくて、みな宮司さんやと（思っていました）。」

2.6 社司・社掌について

戦前までは諸社以下(官社に対して民社)の「宮司」は社司・社掌といった。社司は社掌を指揮して祭祀を掌り、庶務を管理する。府県社・郷社には社司・社掌が、村社以下には社掌が置かれた。御幸森天神宮の社格は村社だったので、社掌が置かれた。

「(年表に)初めて1872(明治5)年に兼務祠掌・友田参馬とありますので、その人以来、1902(明治35)年兼務社掌・今江佐一郎さん。1908(治41)年初代社掌・蔭山豊太郎さん。1914(大正3)年第二代社掌・森山博さん。1916(大正5)年第三代社掌・森山正美さん。1919(大正8)年第四代社掌・菅森寿さん。1925(大正14)年第五代社掌・吉本正之助さんというのがおります。」

「(この方達は)多分お祀りだけに来られたんやと思います。よく田舎の方にいったら神主さんいてへんときは、側のおっきい神社から神主さんがまわってきて、お祀りに。そういうことやったんやないかなと。やから、そういう神主さんの事情によって祭日をどどんつくっていく。そうせんと、神主さん回りきれんのでね。」

この後、1928(昭和3)年、第六代社掌にお爺さんの森田賢治が就任する。初めて常駐することになったと思われる。

2.7 戦後の神社本庁

神社本庁は民間の宗教法人である。戦前の国家神道体制下では、神社を統括していた神祇院(しんぎいん)が内務省の外局に設置されていた。明治憲法は信教の自由を謳っていた建て前上、神社神道は宗

教ではないとし、宗教行政は文部省、神社は内務省の所管だったのである。この体制が敗戦後の1946年2月に廃止されたことにより、伊勢神宮を含めて全ての神社に対して、国や地方自治体から共進金や神饌幣帛料、補助金が支給されなくなった。そこで、大日本神祇会、皇典講究所、神宮奉斎会が合同して新しい宗教法人「神社本庁」を1946年2月3日に設立した。神社本庁は伊勢神宮を本宗とし、参加は各神社の判断だが、実際にはほとんどの神社が傘下に入った¹³⁾。

「戦争が明けてから、その国家神道がなくなってから、神社は神社だけでやっていかなあかんということで、神社本庁というのをつくって、全国の神社を統括して。戦前は国家がみてた。」

「ここも神社本庁に入ってます。大阪市内は、本庁にたいがい入ってるんですけど、府下へ行くと、単立(タンリツ)神社というのがあってね。」

「入ってないところもある。弥栄さんも単立なんですよ。」

3 神社の経営と事業

3.1 社殿建設

御幸森天神宮は神社の継続・繁栄のために、さまざまな事業を行ってきた。1928(昭和3)年に第六代社掌に祖父の森田賢治が就任して最初に取り掛かったのが、新社殿の建築であった。1930(昭和5)年竣工。概算で総工費4万2千円(今の価値で約2億円)、設計は社寺建築の権威吉田種次郎、建築工事は猪飼野出身の氏子である永田三次郎が請け負った。旧社殿は江戸中期の歴史的建造物として評価が高かったため、境内社御幸稲荷神社に移築された。

「かなり立派なというか、たいそう立派な(新社殿です)。こういうちっさい神社にしてはね。」

「当時は、かなり御大人が氏子の中にいたということですね。例えば、その木村権右衛門さんとかね。一説によると、生駒まで他人の土地を通らずに行けたという。」

「社殿改築、設計が吉田種次郎という人。それから施工は永田三次郎さんって方。これは、土地の方ですわ。小路村あたりの。」

「旧本殿を改修し、稲荷社の社とする。ちょうど今のお稲荷さんが、この(社殿が)建つ前の本社やったと。」

3.2 神輿の購入

神社の年表に、「1943(昭和18)年神輿購入(神輿渡御を計画するも敗戦で中止)」とある。大阪は1945(昭和20)年3月と6月の空襲により大きな被害を受けたが、幸い猪飼野のダンジリと神輿は焼失を免れた。しかし、戦争中は若者が減ってダンジリの曳航はできなかった。

「昭和十八年に神輿を購入したんです。戦争中やのに神輿買って。戦後、神輿渡御(みこしとぎよ)を、お渡しをしておりますけど、戦前は神輿渡御も、えべっさんもそういった行事はなくて。ただ祭典はまあすると。明治以降はダンジリも出たそうですが、(戦争中は若者が居なくなりできなくなります。)」

「やから、今のようにお神輿の渡りとか、えべっさんとか、なかったわけで。せやからあの、境内も本正しい境内。ちょっと写真とか見ましたけどね。今みたいに祭りのたびに出店が出るので、ちょっと荒れるわけで。」

3.3 戦後の神輿渡御

1949(昭和24)年の「復興祭」では、猪飼野地車も市庁舎目指して行進した。1950(昭和25)年の夏祭りでは、神輿渡御¹⁴⁾と獅子舞巡航を戦後初めて行った。ちなみに、猪飼野地車は敗戦の年の秋にダンジリ曳航を行ったといわれている。いずれも、1946(昭和21)年、第七代宮司に就任した森田道三の時代である。

「お渡し、獅子舞、えべっさん、これはね、親父の時代ですな。」

「なんでいままでなかったものを執行するようになったかという(と)、戦争に負けてこの辺の街も元気がなくなってる。元気だしてもらわなあかんと。で、えべっさんもお渡しもしたわけですな。」

3.4 えべっさん

1952(昭和27)年、勧請奉祀して別社御幸戎神社を建立した。これが、えべっさんの始まりである。御幸戎奉賛会初代会長は岡本佐一であった。

「本殿も建ったし、あと境内を充実さすとか、神社財政を良くしていくとか、えべっさんもそのためにしたわけで(す)。戦争に負けてこれから神社やっつかれへんかもしれんてことで、えべっさんしよと。岡本さんいうて、材木屋さん。岡房さん。」

「岡本さんは商売人やから、『宮司さん、えべっさんでもやろうや』って、こういう話で。ちょうど戦後からだんだん経済成長していく時代で、えべっさんがずいぶん流行ったんですな。」

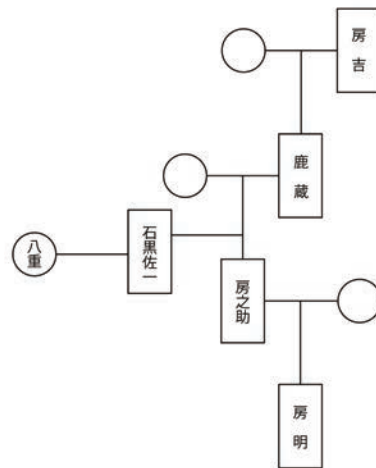


図1 材木商(株)岡房商店系譜

「まあ、そのおかげで神社も成り立ってる。」

ここで岡本佐一について記しておくのも無意味ではあるまい。株式会社岡房商店は、平野川沿いの材木屋である。創業1912(大正元)年。立売堀で川仲仕をしていた岡本房吉が鶴橋で材木屋を始めた。房吉の息子が鹿蔵。鹿蔵は1928(昭和3)年に早世し、番頭の石黒佐一(岡本佐一)が養子に入り、八重と所帯を持って岡房を支えた。その後、鹿蔵の息子の房之助(大正11生・1922)が1959(昭和34)年、37歳で社長に就任する。鹿蔵が亡くなった時、房之助はまだ6歳だった。それで、佐一が31年間、大黒柱を務めることになる。房之助の息子は1949(昭和24)年生まれ、房明¹⁵⁾。ここに出てくる岡本佐一が、図1の石黒佐一である。

「この辺、材木屋が多かったんですわ。(平野)運河沿いにね。」

「外材に押されて、材木屋さんもだんだん衰退していったという。ですから、商売もなんでも、時代によってよくなったり悪くなったりして。」

「昔、材木屋いうたら大金持ちばかりですからな。山持つてる人とか、吉野の山持ちとかね。」

「今はもうあんまりええことないみたいですな。」

3.5 登録有形文化財指定

「2,000(平成12)年、登録有形文化財に指定されると。ですから、本殿、拝殿、幣殿、それから透塀(すかしべい)と、あれが文化財になったわけですね。まあ、以来ずっと無事に今日まで神社としていける(やれている)。)」

4 神社組織

4.1 神職の職階について

神社の職階には、宮司・権宮司・禰宜・権禰宜などがある。権宮司は明治神宮など一部の大神社だけである。宮司・禰宜は1つの神社に1人だけ、権禰宜には制限はない。また権禰宜の下に宮掌(ぐじょう)という職階がある。宮掌は伊勢神宮や熱田神社など特別な神社のみに置かれる。前出の石清水八幡宮は権禰宜の下に典仕・出仕という職階がある。

「うちは宮司・禰宜ですけどね。これは、おつきいとこなんかは、住吉大社なんか行くと宮司、権宮司ふたりね。」

「その次に、あの禰宜、それから権禰宜か。」

4.2 責任役員と氏子総代について

宗教法人法(1951[昭和26]年4月3日制定)の目的は、「宗教団体に法律上の能力を与える事」(法1条)にある。宗教団体が法人格を持つことを可能とする法律である。この法律に基づく宗教法人とは、宗教者と信者でつくる、法人格を取得した宗教団体のことである。したがって、法人化した宗教団体の構成要素は、宗教者、信者そして法人という事になる。法人は宗教者、信者とは別の独立した存在である。そこで、この法人を管理・運営する機関が必要になる。それが責任役員である。責任役員は3人以上、そのうち1人が代表役員となる(18条1)。

責任役員は法人の事務を決定する。法人の事務とは、財産管理、取引、増改築など世俗的な事務の事である。決定は責任役員定数の過半数による。責任役員の合議体である責任役員会の設置は定めがない。したがって、法人の規則で決める事になる。

代表役員は法人を代表し、責任役員が決めた事務を総理する(18条3)。代表役員は規則に定めがない限り、責任役員の互選で決める。

法には責任役員の選任に関する規定がない。そこで各法人で定める事になる(12条1-5)。法人規定には、代表役員・責任役員の任免、代表役員の任期・職務権限、責任役員の員数・任期・職務権限を定める。ほかに責任役員の退任・辞任・解任の規定を定める。

また、法には総代・総会・様々な諮問機関などの定めも無く、法人規則でこれらを定めて任意に設置することができる。

さて、御幸森天神宮の場合を表1に整理した。まず、宗教団体としての構成は、神職・氏子・法人となる。

「それから神社には、神職と同時に総代さんがいる。」

「あとまあ、総代さん以外に責任役員さん(がいてる)。」

まず、信仰的役職について。氏子は約8,000軒、その中から氏子委員200人、そして敬神婦人会290人。その上に各町会長51名からなる氏子総代がある。氏子総代の合議体として年2回、慣例として宮司が招集する氏子総代会を設置している。

「うちは、氏子総代っていうのは51名いるんですね。各町会長は、氏子総代になっていく。」

「その下に氏子委員がいますね。大体200何人ご奉仕してもらってます。」

「それから、敬神婦人会ってのがあって、えべっさんとか夏祭りとかのお手伝い、食事を出したり、笹を作ったりしてもらってます。290人くらいいると思います。」

1908(明治41)年、宮座がなくなり、氏子総代制が発足する。敗戦まで、神職と4名の氏子総代で運営していた。この氏子総代は今の氏子総代とは別である。

次に、法人としての法的役職がある。責任役員7人、うち代表役員を宮司が務める。

表1 御幸森天神宮・組織

<法的役職>	<信仰的役職>
責任役員会 代表役員1名(宮司) 責任役員6名(氏子総代会で決まる) 意思決定機関 *代表役員が招集 決定事項 ・宮司の進退 ・不動産・財産の管理 ・建物の新築・改修 ・予算・決算など	氏子総代会(氏子総代の合議体)年2回 *慣例として宮司が招集する 氏子総代 51名(各町内会長) ・神社の祭祀活動の協力者 ・責任役員会の議決に関与しない 氏子委員 200人 町内会から何人か出てもらう 敬神婦人会 290人 氏子8千軒。大成・北鶴・鶴橋・御幸森・中川・舍利寺(6地区)

「必ず奇数にするというしきたりがある。というのは、何かの時に話が分かれてしまうと、偶数やと（不便やから。）」

法には責任役員の選任に関する規定はないが、御幸森天神宮では責任役員を責任役員会で選任している。また氏子総代会長には責任役員が就任しており、この選任を総代会で承認してもらうようになっている。承認した氏子総代会により役員が解任されるという事はない。それは法人規則による事になる。

また、法には責任役員の合議体である責任役員会の設置の定めはないが、御幸森天神宮では責任役員会が設置されている。

法人と氏子の関係については、森田宮司は次のように述べている。

「(氏子) 総代会を年二回してまして。その時に責任役員会で予算決算を決めて、今度は総代会にかけてこういうことですよと（説明している）。責任役員会で諮ったことでも総代会にかけて承知してもらう（ようにしている。）」

このように、法人の決定事項を氏子総代会にかけている。法人の総会の代わりに氏子総代会を利用して、周知徹底を目的にしているものと思われる。

一 責任役員と氏子総代はどう違うのですか？

「責任役員は、なんか重要なことがあるときにその信仰形態と違って、財政とかそういう、世俗的なことを司る。」

「私が理解するところで行くと、総代さんは気持ちというか自分の信仰に応じてだけど、責任役員さんは行政的な中で責任を負わされてはる。そういう役割の違い（がある。）」

「だから氏子総代さんはそういう（財政・金銭などの世俗的な）責任は負わない。」

宮司は聖俗あわせ持つということか？

「私は宮司とその代表役員とやっている。兼任しているんです。」

「だから聖俗を負っていくと。」

4.3 氏子について

氏子は神社の祭祀圏を構成する人々のことである。御幸森天神宮は約8,000世帯、住所地では大成・北鶴・鶴橋・御幸森・中川・舍利寺の6地区になる。

「(氏子さんは)八千軒って言われてるけど。今人口減ってるからもっと減ってるかもしれませんけども。」

「(住所地でいくと)大成地区、北鶴地区、それから、鶴橋、御幸森、中川、それから舍利寺この6連合かな。鶴橋の場合は、弥栄さんの区域と学区が一緒やから、一緒に鶴橋やね。戦前はみな猪飼野でした。せやからわかりやすかった。」

4.4 氏子納金について

宮司の話では、氏子納金の目的は神社護持・維持のためであり、納金の額は戦後ずっと同じ額に据え置かれている。徴収は、地域の神社の祭礼の場合など、その祭祀圏を構成する住民が神社の氏子であるとして寄付金が徴収されるが、任意団体である町内会の町会費と共に徴収されており、一方的・強制的な場合は信教の自由を侵害することにもなる。そこで宮司は「個人の自由意思」でしており、金額も戦

後直後から同一金額に据え置かれているが、「ちよつとでも頂く」ことにより地域と繋がり、氏子と繋がっていくことを大切にしているという。これは、先代の父親の考えを引きついでいるという。

「(氏子納金の集金は)それは町内会のところで。」

「昔は町内会では頂いていなかった。個人的に何(寄付集め)してたんです。戦後、日赤奉仕団つのがあって、そこへ頼む(ことになった。)」

「神社護持、維持のためですな。」

「これは個人個人の皆さんの、意思によって成り立つ話で。そりゃあ嫌な人がいるかもしれない、なんていうかご自由に（お願いします）っていう感じですね。」

「うちの親父が言うには、そうしてちよつとでも頂くことによってつながっていくんやと。もういいやってやめてもうたらつながりはなくなると。なるほどなーと（思いました。）」¹⁶⁾

5 在日コリアンとの関係

5.1 在日コリアンの居住

宮司はここまで話すと、次にコリアタウンや在日コリアンのことを話し始めた。

「神社のことはだいぶ長なったけど、あとは、街のコリアタウンの話ですけど。」

「大正時代に、あそこの運河を掘るために人を集めたと。で、当時、朝鮮は日本の国でしたからね。で、その、朝鮮で働くよりもこっちの方が実入りがええと。そういうような話で。もちろん日本人も同

じように働いていて、結構よかったという話で。ま、そのために朝鮮の人が、こっちへ渡って来たと。」

ここでいう「運河を掘る」とは、大正11年(1919年)7月起工、昭和2年(1927年)6月完工の、鶴橋耕地整理組合による新平野川開削工事の事である(東浜1997)。これは、蛇行して雨ですぐに氾濫する平野川を直線の運河に付け替える大規模工事で、耕地整理と下水工事を目的とした。この工事に多くの朝鮮人が川堀労働者として働いたのである。

当時(1928年)の日本人と朝鮮人との賃金格差は、人夫で日本人最高2.00円、朝鮮人最低1.00円。土方で、日本人最高2.80円、朝鮮人最低1.70円であった(2019年、李清一の学習会資料より)。

この工事に従事した朝鮮人は工事終了とともに次の工事現場へと移って行き、そのままこの地域に居住することはなかった。その後、この地域が宅地化され、そこに借家し、居住し始めた朝鮮人は、町工場で職工として働く済州島出身の人達だった(金1985)。猪飼野に朝鮮人の居住が増大するのは、1923(大正12)年に大阪・済州島間の直行便航路が開設されて以降のことになる。それもまだ、1922年まではこの地域のほとんどの住民は日本人であり、1923年と1924年には合計で朝鮮人は16世帯にすぎなかった(同: 35)。

5.2 コリアタウン

1920年代後半から猪飼野に朝鮮市場が出来始めた。当初は今のコリアタウンから一本南の通りであって、朝鮮人で賑わったという。表の御幸森商店街も鶴橋公設市場が1926年に開設されて以降、発展して行った。その後、戦争の激化によって商店主達も疎開して空き店舗になり、低賃賃料で裏の朝鮮市場の人達が借りて移り住んだ。御幸通商店街は1945年6月の空襲で東側半分が消失した。戦後は、疎開した商店主が戻って来ない空き家が増え、そこへ賃貸や購入で朝鮮人が移り住み、表通りに朝鮮市場が形成されてきた(高2011)。

1960年代の朝鮮市場や路地裏などを写した写真集には、チョゴリを着たオモニや所狭しと並べられた白菜・ニンニク・魚の乾物などが、大勢の人達と共に写っており、その喧騒が聞こえてくるようである(曹2003)。

御幸通商店街は意見対立により戦後3つの商店街に分裂して「朝鮮市場」と呼ばれる様になり、一方、鶴橋駅前には闇市から通称「国際マーケット」へと発展して活況を呈した。

90年代に入り、御幸通商店街は「朝鮮市場」から多文化共生を目指す街「コリアタウン」へと再生して、現在の賑いを作り出している。

「(在日の)人達がこの街中の要するに路地に大体住まいしていた。この表は、大体日本の商店がずっとあったわけです。」

「で、だんだんその、なんていうか、日本自体が衰退してきて、で、それから商店なんかは跡継ぎがいなくなる。」

「特にこの商店街の人らは商売繁盛やから、他所の商店街みたら今やカッターやらシャッターやらでみな衰退してるけど、ここはどんどんいいと。それに、まあ金持ち喧嘩せずというか、今は穏やかな街になってますけどね。」

「私らは別段あの民族とか宗教とか、関係なしに一応ここに住んでる限りは氏子やと思ってますのんでね。そやから、商店街が繁盛するということはええことやと思ってます。」

5.3 民族差別とヤクザ

「で、そういう人達(在日)がだんだんだんだんと住み着いて、そうして一生懸命働いて。だいたい一生懸命働いてはるんですわ。」

「そういうこと(差別)もあって、えらい苦勞してると思いますよ、子供の時から。今はもう就職なんか絶対に入れないでしょ¹⁷⁾。で、普通の会社は相手にしない。そうするとおのずと仕事の範囲が決まってくる、というようなことでね。」

「そりゃあ、あの、なんていうか、気の毒なような、こともありましたけどね。」

「もっとも戦後は貧乏やったからね、日本人も。だけど、その中でも苦勞してるからね。若い血気なモンはヤクザになるとか。」

「そらわからんでもないですね。昔、その山口組とこの辺は明友会っていうヤクザ組織があって、喧嘩したと。だいたい皆、殺されたり。私らの知ってるもんもありますけどね。」

「いつくらいかな。1950年、60年くらいかな。」

「まあそんなばっかりやったからね、言い出したらきりが無い。」

明友会とは、昭和30年代の猪飼野が生み出した、一千人の構成員を擁する朝鮮人愚連隊である。1960(昭和35)年8月、猪飼野で山口組対明友会の戦後最大の暴力団抗争事件が勃発し、これで明友会は一挙

に壊滅した(黄2016)。

6 神社と女性

6.1 神道と「女人禁制」

宮司は、神道には「女人禁制」というのは基本的に無いという。

—お相撲は神事やと。女性は土俵に上がれないとかあるやないですか。女人禁制は神道のなかに根拠はあるんですか？)

「神道というか、アマテラスさんは女神やからねえ。せやから、それはないと思うねんけど。まあ、土俗的な神道ならひょっとしたらあるかもしれんけど、相撲とかそんなんはこじつけかも知れんね。」

—勝手にそれを伝統とか言ってるって、そういうことですか？

「そうです。で、神道より真言密教の方があらんちゃいますか。あの大峰山とか。」

「あの女人禁制。あっちこっちの修験はありましたけど、それもだんだん今ならすぐ人権(問題)になりますからね。神道はもともとおらかなものやから、どっちかというとなら真言密教とかそっちの方が主流かね。」

6.2 お宮参り

—神社さんには女性が「穢れている」だとか、そういう位置づけはあるのですか？

「そうやねえ。例えば、神事で本殿へのぼるとき、お宮参りでもみな来はりますわな。で、結構みんながちょっと30日たってないから鳥居はくぐりませんとか。で、(それは)別に神道が教えたわけではない。世間がそういう(ことをする)時代やったと。」

「例えば30日、ええ、男が30日、女が30日か？(男の子が生後31日目、女の子が生後32日目)。要するにお宮参り、きっちりするとね。」

「それまでは遠慮したいと。女性の方から、お母さんやな。でも、今そんなんいう人いてへんもんで。なんかそういう教えというよりかは、なんとなく忌避するっていうのか、それぞれの時代によって違うと思います。」

6.3 血をきらう

「で、昔聞いたことはあるけど、なんかのときは榊の葉をちょっと髪に刺して、それからお参りするとか。それだけ戒律というか、みんなが持ってたわけですわ。別に誰が教えるわけではないけども、多分ね。」

「上手いことなってますねん、そういう意味では。榊の葉を刺したら神社に参れると。」

—女の人がですか？

「女の人。男はどういうわけか、あんまりないわけ。そりゃあ出産とかいろいろ、割りと神道は血を嫌うところがありますからな。穢れとかいうて。で、やっぱりこれも余裕があれば忌避するねん。あの、ホンマにそんなこと言うてられへん時代があるわけやから。ですから、それはそれで、まあそれぞれ神さんを大事に扱うという気がそうされたんかもしれんし。まあ、そんなことかなあと。」

6.4 戒律

—戒律みたいなものがあるというわけではないんですか？

「戒律というか、例えば清めるって。清め祓いやから、お祭りのときには水かぶって祭典に出るとかいうことはありますけど、それは神職だけで。」

—女性に対する決め事や戒律はないということでしょうか？

「有るかもしれんし、無いかもしれんし。」

「なんていうか、適当な決まりでもあったほうがええ時代もあって、もう今はあんまり男女のそういうことは口にするだけでもセクハラで、みな会社を辞めたり町長さんをやめたりしはるねんから。」

6.5 ダンジリと女性

—ダンジリは神社のやるお祭りへの参加ですが、女性が乗れない位置というのが有りますが？

「ダンジリも、ちょっと前は子供でも乗せなんだけど、この頃はみな乗ってるからね。というのは男が少なくなって、女の人の方が元気やから(笑)。」

「もう必要で、そうなったというところがありますなあ。」

—では、ダンジリで女性がトップの上で踊ったりするのができないってのも、だんだんそういうのもなくなって可能性もあるということですか？

「まあ、上で踊ったりすんのは、大体とび職みたいな人がするわけで。」

「時々落ちますのでね、何年間に一回。女の人は、体操選手くらいならいけるかしらんけど、普通の女の子は難しいんちゃうかな。危ないし。」

7 猪飼野保存会

一 神社と猪飼野保存会の関係は？

「えっとね、私らの子どものころはなんていうか、ダンジリはダンジリ、宮はんは宮はん。」

「ダンジリは村が持つてるから。神社で持つてたらまた別やけども、アレは猪飼野村が明治につくったダンジリで。活動もそうですわ。せやからダンジリはダンジリでケガしても問題があってもダンジリで処理する。ある意味楽で。(神社とは)関係なく。」

「せやけど、私ね、十数年前にこれではアカんと。あまりにも分離してると。それでね、お渡り一回出えや言うて、袴着てもうて、お渡りに行ったんや、一緒に。」

「そしたらね、猪飼野ってこんなに広いかって言うから。要するに村のもんって、もう村にしか頭になかったから。で、だんだん向こうの役員も同じくらいの年齢になってきて、『お前おれ』の仲になってやね、そういうことも言うて。で、乗ってみたらこんなやつたど、恥ずかしいて言うわけよ。自分が猪飼野のどれだけ広いか、知らんねやから。」

「それ以来、もう神社の提灯は吊ってくれるし、色々手伝うてもろてると。また、この頃手伝ってもらわんとやってかれへん。」

「一村と別々にやってたのをこれはアカンていう風になって、交流が始まったのは、いつくらいの話ですか？」

「これが平成10年やから20年前やね。まだ若いですやろ。これがKさんやね、Mのkさんやね。これが今の会長や。」

「交流はありましたで。せやけど、袴を着て出たのはこれくらいからや。」

宮司によると、20年前までは神社と保存会は割りと疎遠だった。しかし、その頃からお互いに積極的な交流をはじめようになったという。保存会がまだ若中会であった頃の戦後20年間は、旧村の村長に連なる人達によるダンジリの私物化という旧体制が続いていた。これに当時の若者達は反抗し、旧世代

の退場を願っていた。その後、完全にアンシャンレジュール(旧体制)が退場した後、そして新しい体制と方針が出来上がってきた頃、神社と保存会の関係もうまく回り始めたことということになる。それは1997(平成9)年、第19代保存会会長に川野恵弘氏が就任した頃である。今ではお互いの努力により、切っても切れない関係になっている。

「これから保存会はどんなグループになっていくのがいいと思いますか？」

「さあ、別に今のままでいっただええんちゃう。せやから、女性の問題もあるし、そんなんは時代が解決してくれるやろし。お互い子どもやないねんから、それぞれ協力し合っただええわけ。それぞれの領分を犯さなんだら。またそれをみな、わきまえてはって。」

「で、Mのkちゃんおりましたやろ(保存会リーダーの一人)。あの人(神社の)責任役員やで。」

「せやから大概是みなダンジリの会長、あそこ(歴代氏子代表等の額面)に並んでんの多いで。」

8 地域における神社の役割

神社にとっての地域とは氏子の居住地域であり、全居住者が氏子であるという想定になる。そこには民族や宗教、文化の違いは存在しないことになる。あるいはそれは前提という事になる。そこで神社は、地域の変化や時代の変化に対して敏感であって、それに対して神社自らが変化して行くことを重要視している。

「そりゃあ色々変わってきてますよ、ものすごい。食事ひとつにしてもね。昔、婦人会がご飯からおかずからみな作ってました。それが伝統みたいなもんで。(しかし)だんだん婦人会が若返ってくると、勤めてる人も多くなるし、だからだんだん簡略になってくると。作ってた弁当は弁当屋の仕出しに変えるとか。」

「そうして時代時代で変わっていかんと。お互いダンジリも神社も氏子の皆さんも。違いますか？神社がどうのこうの言っても、そんなに聞きはれへんと思うけどな。」

しかし地域における神社の役割に対してシクリした回答が得られないので、このテーマで宮司に二度質問した。

宮司がいうには、神道には「ことあげせず」という

いい方があるという。「言挙げせず」と書き、「議論しない」という意味である。「何のために有るのか」とか「地域でどういう役に立っているのか」という設問はそもそもしないという事のように。神社は昔から地域の神社としてそこに存在しているのだから、事改めて考える事はないというのだ。神社の宗教活動とはまずお祭りをする事であり、夏祭りに神輿でお渡ししたり、地元のダンジリが回ったり、そういう事でできる繋がりが何よりも大切だという。

神道には仏教やキリスト教のような経典がない。神道が宗教かどうかという問題にかかわって来る事柄でもあるが、経典によって繋がるのではなく、関係によって繋がるということのようだ。そして次のように言う。たぶんこれが神社の地域での役割である。

「だいたい神さんというのは困った時に行って頼んだらええのや。なんかあったら、厄年になったらお祓いしてもらったり、病気がしたら病気のお祓いしてもらおうとか、仕事がうまい事行かないからなんやとか、まそういう悩みというか、思いというか、そういうあれがお参りしてお願いすると。」

「別に神社やからお参りしなさいよと、あんまり言わへんけどな。」

9 在日女性と神社

宮司によると、多くの在日の女性達が神社に参拝に来るという。それは商店街がコリアタウンになる前から増えてきたという。また在日の参拝者は商店街の人達に限らず猪飼野全域から来るともいう。

「コリアンの人でも何かあったらお参りに来るわけやから。」

—やっぱ女性が多いんですかね？

「むこうの人の場合は女性が多いかな。」

—いつ頃から増えたとかだいたい分かりますか。

「さてねー、いつ頃から。まあ商店街がコリアタウンになる前、もうちょっと前か。」

願い事には、祈祷・お祓い・相談など千差万別だという。

「地鎮祭をしてほしいとか、井戸が出て来たので井戸のお祓いをしてほしいとか、店を出すのでお祓いをしてほしいとか、何かにつけてお願いには来

ていますよ。」

「いま兄弟でうまくいってないのでどうしたらいいかとか、何でも聞いてくるんですね。」

「話を聞いてもうて、話をして、それですつと気分良く帰ってもらうたらそれでいいので。」

在日の人達には自分達の宗教があるのに、神社に参拝しても問題ないのか、宮司の考えを聞いてみた。

「それは何もないでしょう。」

「あの人らも古い民族やから親代々葬式もあるやろうし、結婚式もあるやろうから。」

また、よく参拝する人はだいたい決まっているという。常連参拝者名は本殿正面左の〔毎月一家内安全・商売繁盛一祈願〕の所に名前が書いてある。それによると、12月初めには47名中24名が在日であり、在日の内5名が女性であった。実に半数が韓国朝鮮の人達である。また宮司の実感である「むこうの人の場合は女性が多いかな」というのは、この数字では確認できなかった。

10 王仁博士歌碑建立——多文化共生の共同事業

御幸森天神宮の北側の門(裏門)の本殿東側・玉垣の内側に「難波津の歌」を記した王仁博士歌碑が建立されている。王仁博士は仁徳天皇の父・応神天皇の時に百済から渡来し、『論語』や『千字文』をもたらしたといわれる(王仁博士歌碑建立委員会2011: 7)。しかし、王仁博士歌碑建立委員会特別顧問の上田正昭氏によると、王仁博士が渡来した時代に『千字文』は存在しないことから、『論語』はともかく『千字文』も持ち来たとする訳には行かない」という。しかしその後、『千字文』が民衆の初級文字学習に広く使われるようになったので、文字文化の祖である王仁がこれを持ってきたといわれるようになったのではないかということである。また、“なにはづ”の歌は古今和歌集の「仮名序」ではじめて王仁博士の歌とされたという。今でも浪速区、此花区、咲くやこのはな館など、この歌ゆかりの名称があり、“なにはづ”の歌が難波と縁の深い歌だということになる。

歌碑には、向かって右側に藤原宮出土の「木簡」に示された「万葉仮名」、中央には藤原定家直筆の「古今和歌集」からとった「かな文字」、左側に朝鮮通信使の元対馬藩通訳官の雲明がしたためた「ハングル」

の書の三列で書かれている。右から時代順である。

歌碑建立の企画は2008年11月に始まり、2009年4月に王仁博士歌碑建立委員会が設立された。記録に残る限りでは役員23名、在日と日本人が約半々で構成され、地域の各界の代表の方達が名を連ねている。特別顧問の上田正昭氏(京都大学名誉教授)による「王仁博士と『難波津の歌』」と題する記念講演も行われている。募金は総計約380万円であった(同上)。

この地とともに居住してきた人達が2009年10月、多文化共生の共同事業として王仁博士歌碑建立を成し遂げた。生野猪飼野における在日朝鮮人と日本人の共生100年の歴史の中でも特筆すべき事柄である。

一王仁博士碑・建立の経緯は？

「せやねえ、例のAさんがハングルのその難波津の歌があんねんと。ひいてはハングル一本で出してほしという話で。ところが、なんやかんや言うても猪飼野うかあれで、ハングルはどうも具合悪い言うて。それで、日本語っていうのか、それも混ぜて作ったらどうですぬんという話で。ほなそうしよかいうて、上田先生もそう言うたんかな。それで三行書いてあるわけです。」

「で、これを奉納したいという話で。ところが、異論が出て。ここで会議して。反対論は出るしね、それですったもんだで、総代会長とか責任役員会でまあ、この際しやあないでということ、わかったと。それで出発できたのです。右翼みたいんに文句いわれたりね、いろいろありましたで。」

「ま、ともかく日韓友好のためっていう。ところがね、朝鮮もいれなあかんと。北は朝鮮やから。せやから、あそこに日本韓国朝鮮と書いてある。」

「同じ民族やからね、書くのにはそうしたらえんちゃうかと。みんなが走り回ってようやくできたわけで。まあせやけど、できてよかったと思っますわ。ね、なんにもないより。」

古くから居住している人達が共同事業を成し遂げた。この関係を次の世代がどう発展させられるのか。多文化共生の本質が試されている。

おわりに

本論文は、多文化地域である生野猪飼野における日本人社会の主要な民間団体の代表や個人に聞き取りを行ったものの一部をまとめたものである。この論文では、御幸森天神宮の歴史、天神宮の組織、多文化地域であるが故の在日コリアンと天神宮の関

係、および天神宮と女性の問題、そして多文化共生事業である王仁博士歌碑建立についてまとめた。

御幸森天神宮の歴史では、始まりは仁徳天皇との縁ということで1,600年前にさかのぼると言われる。この章で大和系と出雲系の祭神の事を持ちこんでみた。それは、明治新政府によって祭神を皇統と国家の功臣とする国家神道の形成と、それ以前の、そして戦後も地域の村々には残ったところの八百万の神を大切にす本来的の神道との違いと、また国家神道下における出雲系神社の扱いはどうであったのかという事とを明らかにする事を試みたのだが、うまく論を展開できていない。あらためて別の機会をもちたい。ただ、「出雲系と大和系」という観点で御幸森天神宮を見ると、仁徳天皇を祀り、疫病がはやればこれを鎮めるために京都から少彦名神を分霊して祀り、このように早くから出雲と大和の融合をはかって来たことが明らかになった。この事がその後の天神宮の安定化に役立ってきたのではないかと考える。

御幸森天神宮の名称の歴史は、1871(明治4)年に社格が村社となった折りに社名を「天神宮」とし、1953(昭和28)年に戦後の宗教法人法にのっとり「宗教法人天神宮」とした。その後の1983(昭和57)年、正式に社名を「御幸森天神宮」として現在に至る。

天神宮の組織については、これまであまり解明されてこなかった。この研究によって、およそ分りにくい神社の実態に少しでも近づいたのではないかと考えている。

在日コリアンと天神宮の関係については、在日の居住の歴史、コリアタウンの形成、民族差別による猪飼野少年愚連隊の形成などについて宮司が話してくれた。また、沢山の在日女性が天神宮を参拝している実態についても話してくれた。

天神宮と女性の問題については、神社は女性差別をしているのではないかとその思いを筆者が持っていたので、女性についてどう思っているのかを聞いてみた。「けがれ」や「血をきらう」というのはかつてはあったし、今もあるかもしれないが、それには「上手いことなっ」て、「榊の葉を髪に刺したら神社に参れ」て、問題なくなるというものであった。また、今はそのようなことを言っている時代ではないとの事で、天神宮のホームページの初宮詣には男女の区別は記載されていなかった。

王仁博士歌碑建立については、生野猪飼野における在日コリアンと日本人の100年に渡る共存の歴史の中で極めて価値のある多文化共生の共同事業であったといえる。多くの人達が意見を出し合い、苦しみながら、また外部からの批判を受けつつも、建

立にこぎつけた。この地帯を次の人達が盤石なものにして行く責務があると考え。

本論文の目的は、生野猪飼野の地域研究の発展に寄与する事である。そこで、以上の内容と目的を踏まえて生野猪飼野地域の可能性について、以下考えてみる。なお、筆者の考える地域研究は、ラグラム・ラジャン氏の「地域社会が世界を救う」¹⁸⁾という新聞記事の中心的考え方である「包括的地域主義」にヒントを得ている。また、トクビル(2005)が「アメリカの民主主義」に見た「住民決定」という考え方も、以下の考察の導きの糸である。

この地域に長くから居住して来て歴史と文化を有してきた日本人。一方、植民地であった朝鮮半島、济州島から1920年代に定期航路の就航とともに大阪に多く来るようになった朝鮮の人達。猪飼野には100年に渡って二つの文化が共存し、それぞれ地域の繁栄と生活の改善に努力してきた。世界の歴史をみると、異文化の出会い所に新しい文化が発生し、それが新しい時代を切り開いている。生野猪飼野には、二つの文化の相互理解と行き来が行われれば、ほかには無い新しい文化を創造していく可能性がある。

しかし、子どもの頃には一緒に遊び、家に行き来し、たまには喧嘩もしていた者達も、大人になると交流もまばらになり、ほとんど行き来は無くなっている。大人になった今こそ共に交流し、酒を酌み交わし、互いの祭りを相互訪問して地域のことを語り合えるようになりたいものだ。そして、共通の事業を成し遂げて地域づくりを共にしたい。そこには民族や国籍、文化によって差別されない、人権が満たされた国際基準の文化が形成される。居住者の誰もが発言し、決定に参加できる、そんな町になる可能性を生野猪飼野は秘めている。

本論文では神社の戦争責任について触れていない。そこで、井上ひさしの戯曲を取り上げておく。井上ひさしは戯曲『闇に咲く花』の中で、宮司の長男である健太郎の語りを通じてすどく戦争と神社を批判した。死とは無縁の神社において「出征兵士を境内から『お国の為に喜んで死んできなさい』と死の世界に送り出した時、神社は神社でなくなり、神道は神道でなくなった」と。一方で「ご近所の人たちや通りすがりの人たちの持ち寄ったささやかな願いごとや、つつましい決意や、ほほえましい愚痴や、小さな感謝の念で、この愛嬌さんの境内がおだやかに充たされていた頃」「その頃の境内は、普通の人たちが心の垢を捨てに来て、さっぱりした心になって帰る、そういうところだった」と、神社の本来の姿を語っている(井上1987: 174)¹⁹⁾。このように、神社

は良い事も悪い事も含めて、庶民とともにあったというのも事実であろう。

また、本論文には森田宮司のいくつかの象徴的な言葉がある。「神社として、氏子のみならずのためにやって行く」時には、祭神を加える事も「みんなが納得したらそれでいい」という。また氏素性に関係なく「病気が流行ったら病気の神さん呼びする」ことを躊躇しない。かなりドライな、プラグマティックな思考方法をとっている。さらに、神社も「時代時代が変わっていかんと」、氏子は「神社がどうのこの言ってもそんなに聞きはれへん」と時代の変化を捉えている。時代と社会のうつろいを捉えて神社も変化して行くことに、かなり強い意識を持っている。

筆者はこれまで神社には関心がなく、あまり近づくこともなかった。でも、生まれた家の近くには小さな無人の稲荷神社の祠のようなものがあって、年に1回神輿が出て祭りもしていた。お袋が晩年、その履き掃除をしていたというのを聞いたことが有る。子どもの頃、ここにはいったい何が入っているのかと思い、人が居ない時に神社の中にまで入って行った事がある。しかし、何も無かった。稲荷だからキツネとか何かあると思ったのに。

今回、森田宮司の話聞き、その人柄に触れて、神社がなぜ長い間地域に存在してきたのか、少しだけ分かった様な気がする。それは戒律や決まり事によって動きづらくすることなく、時代時代にあわせて神社が変化してきたからではないのか。国家神道の一時期、日本の歴史で見ればほんの一時期だが、そして戦後の宗教法人化の時期、また今のような人々の生活スタイル、労働の在り方などによる社会の変化にも合わせて、敏感に神社も変化して行こうとする。森田宮司の話に、この静かな神殿の奥に生き生きとした時代の反映を見る思いがした。

注

- 1) 谷の当時のフィールドワークの成果は、(谷2015: 104-149)の第3章「猪飼野の民族関係図書——1980年代」にまとめられている。
- 2) 森田宮司への聞き取りは2018年5月19日、御幸森天神宮にて筆者と森本宮仁子が行った。
- 3) 典仕は、石清水八幡宮で権禰宜と出仕(しゅっし)の間に置かれている職。宮司・権宮司・禰宜・権禰宜・典仕・出仕の職階がある。
- 4) 百済の渡来人酒君が鷹を調教し、その鷹で仁徳天皇が百舌野で狩りをしたという。

- 5) 以上は、我がが主催した「多文化福祉研究会」の2018年9月例会で、「古墳時代の王権と渡来人——河内の猪飼・馬飼・鷹飼・鳥飼——」と題した西川寿勝氏の講演内容からの引用である。
- 6) 「猪甘津の橋」と「鶴の橋」は同じものか？ 松村博(1997: 8)によれば、「今のところ二つの橋を結びつける確実な証拠はない」。古代猪甘津の橋は『日本書紀』にその記録が残されている日本最古の橋とされ、橋の位置は、現在の鶴橋から勝山通りあたりまでの平野川に架けられたものと推定されている。また、猪飼野郷土誌編集委員会(1997: 96)によると、猪甘津の橋を鶴の橋と結びつけたのは、1698(元禄14)年に出版された『撰陽群談』であり、以後猪甘津の橋と鶴の橋が同橋とされて今日に至っているという。江戸時代の浪速百景「猪飼野・鶴の橋」(長谷川貞信画)の中に、鶴の橋ともろこ茶屋が描かれている。橋の長さは、「元文三年(1738)摂州東成郡猪飼野村平野川筋板橋御掛け直し願ひ帳」(御幸森天神宮所蔵)によると、橋全長二十間(36.4m)、幅七尺五寸(2.25m)の公儀橋であった。ちなみに、公儀橋とは公儀の費用で架け替えられる橋のことで、天満橋、天神橋もしかり。1874(明治7)年、鶴の橋は石橋になる。その後、1899(明治32)年、再度石橋で架け替えられた。この時は全長七間(12.7m)、幅一間(1.8m)であった。江戸時代の橋より小さくなっている。これは、1704(宝永元)年の大和川付替え効果が徐々にあらわれ、平野川の水量が激減し、川幅もせまくなったためである。その後、1940(昭和15)年にこの川が埋め立てられ、鶴の橋は廃橋となった。これに前後して、新平野川の開削が1919(大正8)年より始まり、1939(昭和14)年に完成する。
- 7) 社僧行綱は大蔵院行綱のこと。社僧とは、奈良時代の初め頃から神仏習合思想によって神社に付属して建てられた神宮寺(じんぐうじ)に居住し、仏事を行う僧侶。社僧は神前でお経を読んだり祈祷をした。神仏習合思想は、明治の神仏分離、廃仏毀釈によって廃止された。
- 8) 邪馬台国には諸説あるが、ここでは村井康彦(2014)の説に従うこととする。
- 9) 生野区役所サイト <https://www.city.osaka.lg.jp/ikuno/page/000000029.html>「生野区内の神社と寺」2019年3月閲覧。
- 10) 井上智勝(2006)によると、江戸時代、神職は1665(寛文5)年制定の法令「諸社禰宜神主法度」により、「本所」に所属して活動せねばならなかった。「本所」とは、吉田家と白川家という朝廷の神祇官の高官を世襲する二つの公家のことである。吉田家は神祇官の次官であって、京都吉田神社の神主である。白川家は朝廷神祇官の長官を世襲する家であり、格式としては白川家が上位にある。しかし、実力では吉田家が白川家を圧倒している。江戸時代の御幸森天神宮には神主など専業の神職はおらず、運営や祭礼は「宮座」が担ってきた。そこで、本所には神職が所属するものであって農民が所属するものではないから、御幸森天神宮と本所の関係は18世紀後半まで基本的に発生しなかった。しかしその後、本所と神社に接点が生ずることとなる。1782(天明2)年、幕府は「諸社禰宜神主法度」の中に、専門神職だけでなく、宮座も吉田家の免許を受けなければならないことを定めた文章を付加して、120年ぶりに触れを流した。これは百姓身分と神職身分の二つを兼ねることになり、身分制を混乱させることになる。そこで幕府は、「身分的には宗教者でなく百姓である。免許によって神事への奉仕を許可する」とした。しかし、吉田家から入門勧誘を受けた村々の宮座はこれを拒む姿勢をとった。それは、免許料として銀一両を毎年8月1日に吉田家へ納めることになること、さらには村に神職は居らず、神職のように神事に携わる者もいないので、本所に所属して神事を行うとなると農業生産力が減退するからであった。代官所は村の主張を認める一方、宮座を強く禁じた。しかし、代官所の方針にもかかわらず、百姓は、「常夜灯を灯して来た」と実績を主張し、宮座は実体として存続してきた。御幸森天神宮は結局、本所の配下となること無く、江戸時代を推移することとなった。明治新政府は神道国教化により特定の家の神道私物化を禁止し、本所を廃止する。御幸森天神宮は1871(明治4)年2月、田地売却を行い、基本財産を作る。そして1872(明治5)年、村社の社格を得て、政府の神社政策の中に組み込まれて行くことになる(井上2006: 98)。
- 11) 明治政府は明治4年、太政官布告によって神社は国家宗祀(公法人)である旨を定め、神社の格を定めた(社格制度)。これを国家神道という。さらに1906(明治39)年4月、「府県社以下神社神饌幣帛料共進制度」を制定し、地方自治体は諸社に対し、神社経費の一部である神饌幣帛料(祭祀費)に関して公費を支出できると定めた。対象神社基準は、式内社・勅祭社など由緒があること、境内地150坪以上で社殿が整備されていること、氏子50戸以上いること、であった。このことにより、一町村一社の方針の下、統廃合による神社の整理が進められた。戦前、諸社収入の内、公費の割合は8.5%に過ぎなかった(神社の経済学第7回 <http://blog.livedoor.jp/rekishireal/archives/53142318.html>を2019年5月3日閲覧)。
- 12) 近代社格制度は1871(明治4)年7月1日に制定された。官社・諸社・無格社がある。官社は官幣大社と国幣大社で、それぞれに上・中・下がある。そのほか別格官幣社がある。諸社は府県社、郷社、村社がある。さらに無格社がある。
- 13) 戦前の神社制度に関しては、<https://oplern.hatenablog.com/entry/2018/04/08/180650>を2019年5月3日閲覧。
- 14) https://www.jinjahoncho.or.jp/omatsuri/jinja_no_omatsuri/to-gyosai 神輿渡御に関しては、神社本庁のこのサイトを2019年5月3日閲覧。それによると、祭りに伴い、神輿や山車の渡御が行われるとある。神社にお鎮まりになっている神様が神輿や山車にお遷りになり、氏子の手により氏子地域を巡幸して行く。この祭りにより、神と人が一体となり、人々は祭りを通じて活力を取り戻し、神様もこうした人々の姿を見て喜び、渡御する地域の各家々に御神徳を与えて下さると信じられている。
- 15) <http://www.mokuzai-nakagai.com/zaimokuya/index63.html>を2019年5月4日閲覧。
- 16) ちなみに、大阪府下の村落における神職の収入の種類に

は、御初穂(御初穂米)・俸給制度・田地付きなどがある(黒田2008)。

- 17) 今でも大阪市役所には「外国人職員の従事する職に関する規則」があって、何十年勤めても対等に仕事ができないようになっている。
- 18) ラグラム・ラジャンさんのインタビュー記事「地域社会が世界を救う」(朝日新聞2019年6月20日)。
- 19) 井上ひさしはまた、健太郎に「神社は道ばたの名もない小さな花なんだ」(井上1987: 181)とも語らせている。

参考文献・参考資料

- 荒木傳2006「御幸森天神宮の沿革・制度史」『御幸森天神宮壹千六百年祭記念誌』御幸森天神宮
 猪飼野郷土誌編集委員会1997『猪飼野郷土誌』猪飼野保存会
 猪飼野保存会地車修復事業実行委員会2015『猪飼野地車130年記念誌』猪飼野保存会
 井上智勝2006『御幸森天神宮と『本所』』『御幸森天神宮壹千六百年祭記念誌』御幸森天神宮
 井上ひさし1987『闇に咲く花——愛敬稲荷神社物語——』講談社
 上田正昭2012、74『私の日本古代史(上) 天皇とは何者か——縄文から倭の五王まで』新潮社
 金賛汀1985『異邦人は君ヶ代丸に乗って——朝鮮人街猪飼野の歴史——』岩波新書
 黒田一充編2008『神社を中心とする村落生活調査報告(二)

——大阪府北河内郡・中河内郡・南河内郡——』関西大学なにわ・大阪文化遺産学研究センター <http://www.kansai-u.ac.jp/Museum/naniwa/publication/book11.pdf> 2019年5月5日閲覧

- 高賛侑2011「朝鮮市場からコリアタウンへ」『ニッポン猪飼野ものがたり』批評社
 創建壹千六百年祭実行委員会2006『御幸森天神宮壹千六百年祭記念誌』御幸森天神宮
 瀧川政次郎1971「猪甘部考」『日本歴史』第272～273号 吉川弘文館
 谷富夫2015『民族関係の都市社会学——大阪猪飼野のフィールドワーカー』ミネルヴァ書房
 曹智鉉2003「曹智鉉写真集『猪飼野』——追憶の1960年代」新幹社
 トクビル、アレクシ・ド2005『アメリカのデモクラシー』第1巻(上)(下)岩波文庫
 東浜弘静1997「鶴橋耕地整理と新平野川開削」『猪飼野郷土誌』猪飼野保存会
 黄民基2016『猪飼野少年愚連隊——奴らが哭まえに』講談社
 松村博1997「猪甘津の橋と鶴の橋」『猪飼野郷土誌』猪飼野保存会
 村井康彦2014『出雲と大和——古代国家の原像をたずねて』岩波新書
 安丸良夫1979『神々の明治維新——神仏分離と廃仏毀釈——』岩波新書
 王仁博士歌碑建立委員会編2011『王仁博士「難波津」の歌と猪飼野』王仁博士歌碑建立委員会

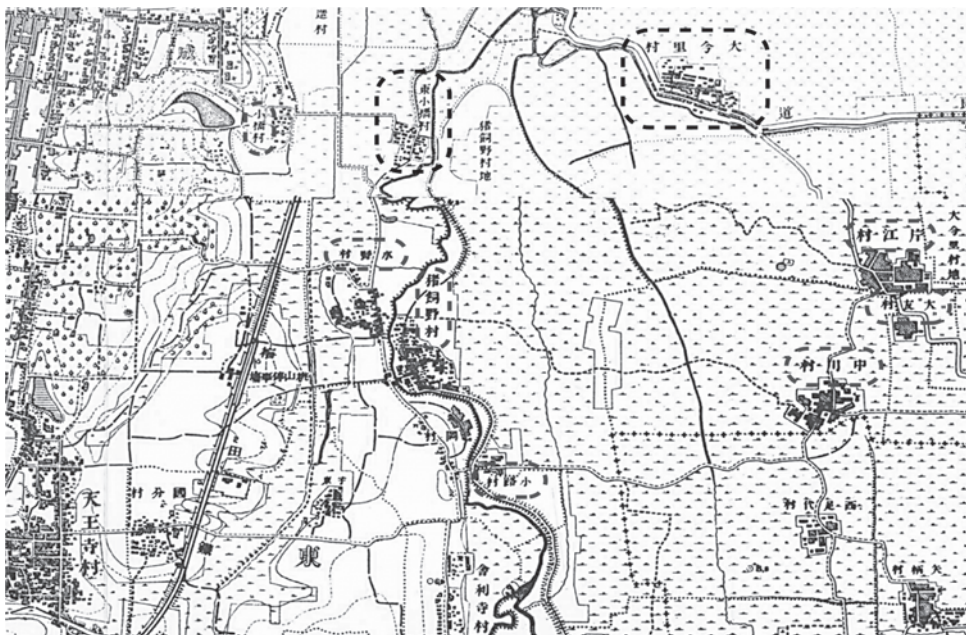


図2 1892(明治25)年 2万分の1地図(上1886年、下1892年)
 1889年の市町村制以前の状況が描かれ、猪飼野村、木野村など、太破線で囲った村々は江戸の藩政村である。
 村はまだ田んぼの中の小島のようなだ。
 「ひがしなりまち歩きアプリ」より引用



図3 1908 (明治41)年 2万分の1地図
 1908 (明治41)年の地図。市町村制後、江戸藩政村は大字と呼称を変え、まとめて鶴橋村、小路村などができる。猪飼野、木野、岡などが鶴橋村に合併された。
 「ひがしなりまち歩きアプリ」より引用。



図4 1921 (大正10)年 1万分の1地図
 1921 (大正10)年の地図。添付地図では見えていないが、ここでは鶴橋村が鶴橋町になっていて小路村はそのままである。
 「ひがしなりまち歩きアプリ」より引用。